

中日新聞 11 月 21 日夕刊の「夕歩道」に「現代の日本人は異常に冷たい液体類を飲んでいて」という話をラジオでお医者さんがしていた。「良しあしはともかくこの傾向はいずれ私たちの体に影響をおよぼすのではないか。」とあった。「いずれ」ではなく、既に「あし」き影響が出ているのである。

さて、娘の通っている小学校の校長に「(給食に温かい牛乳を)のお願い」の申し入れをしたが、おそらく簡単に門前払いを受けるだろうと思っていた。それでも日頃、冷飲食の問題を患者等に訴え、娘が通っている小学校の事でもあるという立場上、言うだけでも言わないといけないと思いがあって、行動に移したわけであった。

数日して、校長から電話があり、学校の栄養師を含めて、お会いすることができた。衛生上の問題、手間の問題、施設・予算の問題、またもっと重要案件がある等、丁重に断る内容だった。牛乳は 10℃以下の保存が義務付けられている。温めるということが、人数が多い学校では、家庭と違い、簡単にはいかない。

私は「食育」の重要性が言われている現在、家庭での冷飲食の一般化に対して、模範を示す意味でも実施して欲しいと話した。また、〈温かい牛乳〉ではないが、埼玉県では地元産小麦によるパンが給食で出されるようになり(『食品と暮らしの安全』No.135)、佐賀市ではポリカーポネード製食器から地元産の磁器製食器に換えている(同No.131)等の事例を紹介した。問題は関係者の熱意で解決できる。衛生面で問題なく手間の少ない、簡易な方法を創意工夫して欲しいと訴えた。その結果、早急な実施は無理だが、検討はして頂けることで話は終わった。

一ヶ月経って連絡があり、再びお会いすることになった。検討・調査の結果を聞かせてくれた。牛乳製造元の引佐牛乳に聞いてくれた。紙パックは温めることを想定して作られておらず、100℃に絶えられないという。また昔は駅で温めた牛乳を売っていたが、衛生上の問題で今はやっていないと。また最近では牛乳を保管庫から早めに出しておくようにしたということであった。

10℃の牛乳パックをずっと牛乳が温まるまでお腹に当ててみれば、その悪影響が想像できるだろう。飲んでしまえば、分かりにくい、同じ様に胃腸の熱を奪っている。保存の為に低温とは生命活動を低下させる温度である。温めるという調理が必要である。

牛乳パックが 40℃に耐えられないとは思えない。最初から学校全体で実施せず、低学年とか希望児童とか人数を限って実施し、要領を探っていくのがいい。

校長は家庭教育の問題が大きいとおっしゃっていた。それは我が意を得たりなので、各保護者に対して、私の申し入れの内容を紹介し、家庭における冷飲食の改善を促して欲しいと話した。全文は無理だが、引用する形で紹介するという事だった。

早急な実施は無理だというのは分かるが、その意義を理解し、その実施に熱意を持って、広く賛同を得ながら、創意工夫すれば、それ程難しい問題とは私には思えない。

千葉県茂原市で、販路拡大を目指した牛乳会社と、エコ的観点を持った教育委員会の熱意から、低温殺菌のビン牛乳が 2006 年 4 月から実施されたという記事(生活クラブ生協『生活と自治No.463』)を紹介しておいた。(2007 年 12 月大雪)